

スローライフへの提言 — 4



第5次総合振興計画策定委員
鈴木文好さん(小宮)

私たちが生まれたのは昭和30年代の初め、戦後間もない頃から比べると、はるかに良い時代になっていたのかも知れませんが、思い出すのはかなり生活が厳しかったことです。

ご飯を食べるにも贅沢は言えなかったし、茶碗にご飯粒を付けていると「そまづにすんでねえ」

「までえに食え」とよく言われたものでした。物を使うにしても「丁寧にしろ」「大切に扱え」と物を大切にするように厳しく言われた記憶があります。しかし、それは米を作る大変さ、食べるもののありがたさ、物をつくることの大変さを身をもって知っていたからだと思います。

今は、スーパーに行けば何でも1年中揃っていて、食べ物から感じる季節感とか、旬の食べ物等は分からなくなったような気がします。それは確かに消費者にとっては好きな時に好きな食べ物が手に入る訳ですから便利でしょうが、逆に考えさせられる時も時々あります。地元で生産された旬の食べ物を食べれば栄養価も高いし、値段も安く、安全で安心でき、資源の確保、更には環境の保全にもつながります。これが、スローフード、スローライフの基本的な考え方ではないでしょうか。

私たちが子供の頃は、夏になると家から塩や味噌を持って出て、川の近くの畑からキュウリをとっ

このコーナーでは、
「新春村民のつどい」で
行われた第5次総合振興
計画提言、テーマ「もっ
たいない」の内容をこ紹
介しています。

て食べ、川遊びをした記憶があります。あの頃は貧しいなりに季節感がしっかり感じられました。今の子供たちは春夏秋冬にどんな野菜が収穫されているのか分からない子が多いのではないのでしょうか？きっと「旬」という言葉は死語になっているのかもしれない。

この他、死語になっている言葉はたくさんあると思います。例えば、「結い」「言い継ぎ回し」「駄賃」等生活に密着した言葉等は今はほとんど使われていません。

先日、テレビで幼稚園児にシイタケを見せて、これはシイタケですか？^{たけのこ} 筍ですか？と聞いたら1/3の園児が筍と答えました。また、スーパーで並んだ野菜や魚の切り身、温めると食べられる調理品等の、すぐに、早く、食べられるものが多く売れているそうです。そのような食材で空腹を満たす、特にそれが特別悪いという訳ではありません。当然わが家でも利用しています。でも人間は生きるために働きます。生きるとは食べることです。食べなければ生きられません。即ち、食べるために働くわけです。

食材を食べられるように自分で調理工夫することこそ私たちが生きる上で最も大切なことではないでしょうか？

その大切な部分を省略して生活している我々は言い過ぎかもしれませんが、食べるということに限って言えば、飼われているペットと大差ないような気がします。ペットは野生に戻れば自分で餌を捕ることは難しいそうです。私たちが生きるためには、食べるためには、大変な苦勞をしなければなりません。

例えば食べ物を買うにはお金が必要です。お金を稼ぐには、勤め先で人間関係を良好にし、安定した収入を得ることが大切です。また、体に良い食べ物を安く手に入れるには、地域の人たちとのコミュニケーションが必要です。その方法を子供たちに教えるには親、家族の力が大きいことは言うまでもありません。

今、同じ行政区に住んでいても区長杯にしか会わない人達も多くいます。人のつながりが薄れ、暮らし方もだいぶ変わってきました。お金を出せばなんでも済んでしまう便利な世の中、果たして「こんな世の中がいつまでも続くのだろうか」と考えると疑問が残ります。そこで考えられることは、「最先端に行く便利で文化的な生活を長く維持する」事も大切でしょうが、私たちが親やお年寄りから教えられた「食い物はまですえに食えよ」「子供はまですえに育てろ」「仕事はまですえにしろ」「物はまですえに使い」「人とはまですえに付き合え」と教えられました。

このように日常生活に密接に結びついた「人のつながり」「地域のつながり」を後の人に伝えていくことが大切だし、これからの時代の要請の

ように思います。

話は変わりますが、成人式の後にこのような話を聞きました。「村民歌」を今年の成人式で歌えない成人者がいたとか、成人者に聞いたら歌ったことがないということでした。おそらく記憶にないのでしょう。

歌えないことを責めるつもりではありません。子供たちに飯館村をもっと知っていただくことが必要だし、村を誇りに思えるような、行政を始めとしたイベントや、学校、家庭での教育が必要かと思えます。その一つとして、せめて「村民歌」を事あるごとに合唱する機会を増やし、各教育機関で歌えるように教えることも必要ではないでしょうか？合唱は心をつなげてくれます。今中学校には「総合的学習の時間」があります。知識としての教育だけではなく、暮らしに密接に結びついた教育ができるということで大変素晴らしいと思います。

しかし、そのような教育は学校に任せておけばよいというものではありません。これからは今以上に学校すなわち先生と家庭と地域が密接に結びつき、それぞれの立場で、毅然として子供たちに教育をしていかなければならないと思います。

スローライフを柱とした第5次総合振興計画づくりも、これからが具体的な取組みになっていきますが、専門部会委員として、地域に住む一人ひとりが「自分たちに何ができるか」を考えることから始めることが一番大切だと感じています。